



舞踊教育における「見る」に関する実証的研究

猪崎, 弥生

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2006-03-25

(Date of Publication)

2008-12-05

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲3621

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003621>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



【 2 2 4 】

氏 名・（本 籍） 猪崎 弥生 （ 愛知県 ）

博士の専攻分野の名称 博士（学術）

学 位 記 番 号 博い第597号

学位授与の 要 件 学位規則第5条第1項該当

学位授与の 日 付 平成18年3月25日

【 学位論文題目 】

舞踊教育における「見る」に関する実証的研究

審 査 委 員

主 査 教 授 柴 眞理子
教 授 宇津木 成介
教 授 米谷 淳
助教授 前田 正登
教 授 小高 直樹

論文内容の要旨

氏名 猪崎弥生
専攻 コミュニケーション科学専攻
指導教官氏名 柴眞理子

論文題目

舞踊教育における「見る」に関する実証的研究

論文要旨

本研究の問題の所在は、筆者の舞踊への多面的な関わりが基点となっている。すなわち、長年にわたる自身の舞踊活動、舞踊教育の経験を通じて、筆者自身が常に抱き続けてきた関心は、踊ることと見ることの関係であり、「踊ること」がもたらす「見ること」の質的変容である。

この両者の関係について、これまで、直接的に言及した研究はほとんど見られない。シーツ、ランガーらのように、舞踊を哲学的に考究してきた先人たちにおいては、舞踊とは何かという命題を扱う際に、「見る一見られる（踊る）」役割を固定的に捉え、専ら舞踊を見る側の視座から見られる踊り手が現出する舞踊現象を見てきたと考えられる。

一方、舞踊教育の現場では、哲学的考察のような固定的な「見る一見られる」関係ではなく、「見る一見られる」という二つの役割が容易に入れ替わり、そうすることによって自己及び他者への眼差しに変化が現れる。自己を表現する舞踊は、他者からの目（見られること）を通して自己を確認するという機能がある。その機能に基づいて舞踊を深く豊かなものとしたいなら、学習者は必ず見る立場と見られる立場の両方に自己を置く必要があり、舞踊教育においては、「見る一見られる」ということを抜きにしては、踊る、創るにおける成長を考えることはできないと言える。

本研究は、この「見る一見られる」のダイナミズムを中心に据えようとするものである。そして、本研究は、舞踊教育における身体表現活動、いわゆる創作ダンスを取り扱う。創作ダンスとは身体をメディアとする表現活動である。身体にある「こころ」を映し出すために目に見える「からだ」を意図的に動かすことでもある。

松本の舞踊課題解決学習における「踊る、創る、見る」の体験から導かれる自分の存在をまろりと投げ出して表現するダンスの授業では、学習者が創作したデッサンを互いに踊って見せ合う。さらに、グループ創作においては、小作品をグループ単位で踊って互いに見せ合う、踊る、創るという行為と「見る」行為が平行して進められる。

このような学習方法は、踊る、創るという体験に基づいた実践を通して、「見る」行為からフィードバックされる踊る感覚を自己の身体に取り込むことを可能にすると考えられる。

しかし、舞踊の「見る」様相の異なりに、舞踊経験の異なりがどのように反映されているのかは未だ明らかにされていない。

筆者の舞踊経験から、舞踊における「見る」には、「審美する」を頂点に、眼で「知覚する」、「認知する」、「感受する」、「評価する」、など、さまざまな様相があり、舞踊経験を積み重ねて一定の筋道を通して変容していくと考えられる。そこで、その変容の過程を1本の樹木に見立て、様々な「見る」様相とそれらの様相間の関係をモデル（樹木図）として設定することとした。モデルを樹木とした理由は、「感受する」、「評価する」、「審美する」は、身体、動き、イメージ、感情、思考、言語、知覚、認知を根元とし、豊かな緑を茂らせる上方に向かって伸びていく一本の樹に例えることができると考えたからである。

日頃から舞踊指導者は、舞踊教育の現場で舞踊の個々の動きを知覚し、さまざまな側面を「ことば」で表現すると同時に、ひとまとまりの流れとして感じ取り、舞踊の全体像を捉えている。舞踊の全体像を捉えるために、舞踊運動から醸し出される表現感、すなわち質感を捉える必要がある。松本（1974）によれば、運動は運動時性、運動力性、運動形態性で成り立っており、力性は動きの種々な表出性の基底をなす性質と示されている。従って、舞踊指導者が舞踊運動を「見る」ためには、運動の力性を捉えることが重要である。このような舞踊指導者は、上述した樹木図のようなモデルに従って力性を捉えることを含めて舞踊を捉えていたに違いない。しかしながら、これまでこのプロセスについて明示した研究はなく、体系的に捉えた理論もなかった。

そこで、本研究では、舞踊を「見る」ことについて、この樹木図を提唱し、それに基づいた3つの課題を実験的に検討する。

1. 舞踊を「見る」ことが力性の知覚によって成立するか
2. 舞踊を「見る」ことがどのような認知枠組みによって基礎づけられているか
3. 舞踊経験が舞踊を「見る」ことにどのように関与するのか

(氏名 猪崎弥生 No.3)

以上の3つの課題の検討に向けて、本論文は序章を含め全5章で構成した。

序章においては、本研究の意味、研究の目的、論文構成、研究の特徴を記述した。そのことを通して、本研究の独自性を明らかにした。

第1章では、舞踊運動の構成要素である力性（強いー弱い）に着目して、舞踊を「見る」ことが力性の知覚によって成立するかを検討した。舞踊運動を見るときに、身体から発するダイナミズムをどのように知覚しているのか、これを検討するために、舞踊運動を構成する3要素の一つである力性を操作した舞踊運動標本を作成し、知覚実験を行った。

知覚実験の結果と2次元動作解析の結果を照合したところ、舞踊熟練者はダンス部学生より客観性、信頼性、妥当性の点で力性の評価が優れていることが確かめられた。すなわち、舞踊熟練者は、舞踊運動中の身体各部位の速度に基づいて舞踊運動の力性、すなわちダイナミズムを捉えていることが確認された。

第2章では、舞踊を「見る」ことがどのような認知枠組みによって基礎づけられているのかを検討するために、評価実験を行い、その結果を多変量解析した。

評価実験では、松本と柴の先行研究に基づき8種類の基本感情（やさしい、楽しい、厳かな、激しい、大きい、悲しい、固い、静かな）を内包する舞踊運動を呈示した。なお、これらの呈示刺激は3次元動作解析により刺激としての妥当性が確認されている。

評価実験の結果を因子分析したところ、力性、時間性、空間性に関する語彙のプールから8つの舞踊運動標本の多様性に応じるには少なくとも19対語の評価用語が必要なことが示唆された。

第3章では、舞踊経験が「見る」ことにどのように関与するのかを検討するために、舞踊経験の異なる3つのグループに対して評価実験を行い、有意差の検討と多変量解析を行った。

有意差の検討から、舞踊熟練者の評価が学生より教師に近いことが示唆された。経験の異なるグループ別の因子分析から、舞踊熟練者の認知構造が学生や教師と比べて統合されており、学生より教師がより統合されていることが示唆された。舞踊運動プロフィールについては、時間性の「加速的ー減速的」、空間性の「対称ー非対称」、「バランスのとれたーアンバランスな」、「大きいー小さい」、「高いー低い」において、舞踊熟練者と学生及び教師の間に差異が見られた。

以上の結果から舞踊を「見る」ことへの舞踊経験の関与について次のように考察された。

① 舞踊熟練者は、19対語の評価用語を個別に捉えるのではなく、2つから3つのまとまった

(氏名 猪崎弥生 No.4)

グループとして捉える。一方、学生では6グループ、教師は3〜6グループであり、熟練するにつれて舞踊運動をより有機的な全体性として捉えていく。

② 舞踊熟練者は、時間性では継続する時間感覚をひと流れで捉える。

③ 舞踊熟練者は、空間性では2次元的なデザインで捉えるのではなく、3次元的な運動範囲で捉える。

第4章では、第1章から第3章で明らかになったことを踏まえて、舞踊経験の相違と「見る」との関連、舞踊経験と舞踊の身体性、さらに、審美眼の形成過程について討議を行った。

その結果、舞踊における「見る」の様相と、それらの様相と舞踊経験との関わりに関して以下の結論が導かれた。

舞踊熟練者は、舞踊を「見る」とき、ダンサーの身体を自分の身体に置き換えて見ている。すなわち、舞踊熟練者は、舞踊を「見る」ことを通して自分の身体にダンサーの舞踊運動を取り込み、同時に自分の身体も踊っているような感覚を生じさせる。これは、舞踊熟練者が持つ独特の身体感覚であると考えられた。

次に、舞踊の身体性とは、踊る身体が創り、表現し、踊りを見せ、見られる経験、そして見る経験を通して醸成されるものであり、そうして得られた身体性が舞踊の創作、表現、並びに鑑賞をより高い次元に押し上げると考えられた。

具体的に、舞踊の身体性を持つ舞踊熟練者の「見る」とは、舞踊の全体性を捉えることができる。すなわち、動き続ける現象をひと流れで把握し、舞踊のダイナミクスを生み出す途切れない時間性と変容する空間性を掴み取ることでであると示唆された。

舞踊を「見る」における審美眼の形成過程については、舞踊を「見る」行為の原初は浅くバラバラで感覚に近いレベルで、学生のレベルになると「感受」となり、さらに、スキルを獲得した教師のレベルでは「評価」となり、最後に、身体化されて熟練者の「審美」となるということが示唆された。

以上のことから、本論文は、舞踊の「創る、踊る」という身体活動と同じレベルで「見る」という行為を見つめることで「樹木図」を設定し、その「樹木図」から3つの課題を検討した。そこから、「見る」と舞踊経験との関連を考察した上で、舞踊の身体性を検討し、さらに、「見る」における審美眼の形成過程を検討できたと考える。

論文審査の結果の要旨

氏 名	猪 崎 弥 生		
論文題目	舞踊教育における「見る」に関する実証的研究		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	柴 眞理子
	副 査	教授	宇津木 成 介
	副 査	教授	米 谷 淳
	副 査	助教授	前 田 正 登
	副 査	教授	小 高 直 樹
要 旨			
本論文は、舞踊教育において、舞踊を踊るという行為が、舞踊を見る見方にどのような質的変容をもたらすかについて、実証的に明らかにすることを目的としている。 舞踊教育の現場では、舞踊の哲学的考察のように、固定的な見る側と見られる側という関係としてではなく、自己への眼差しと他者への眼差しとが交替して「見る－見られる」という二つの行為が容易に入れ替わる、ダイナミックな関係にあることを指摘し、自己を表現する舞踊は、他者からの目（見られること）を通して自己を確認するという特質が顕著であり、踊ること自身がダイナミックであると同時に、踊ることと見ることの総体にダイナミズムがあると考察している。そして、この「見る－見られる」のダイナミズムを中心に据えて、先行研究、及び、猪崎自身の舞踊活動、舞踊教育の経験から、舞踊を見る様相は舞踊経験を積み重ねて一定の筋道を通して変容していくと捉え、その変容の過程を1本の樹木に見立て、様々な「見る」様相とそれらの様相間の関係を図示するモデル（樹木図）を提唱し、それに基づいた3つの課題を実験的に検討している。 第1章では、舞踊運動を成立させる時間性、空間性、力性の中から、表出性の基底となる力性に着目して、舞踊運動を見る際に身体から発するダイナミズムをどのように知覚しているのかを検討するための知覚実験を行い、その結果と実験材料とした舞踊運動の動作解析結果とを照合し、舞踊熟練者は、舞踊運動中の身体各部位の速度に基づいて舞踊運動の力性、すなわちダイナミズムを捉えていることを確認している。			

第2章では、舞踊を「見る」ことがどのような認知枠組みに基礎づけられるのかを検討している。ここでは、先行研究から運動構成要素別に運動の特性を表す言語を選定して評定尺度を作成し、それを用いて、3次元動作解析の結果、異なる運動の特性を有することが確認された8つの舞踊運動を実験材料に評定実験を行い、評定尺度についての妥当性と信頼性の検証を経て、19対語の評定用語が認知枠組みとなることを導きだしている。

第3章では、舞踊経験が「見る」ことに対してどのように関与するのかを検討するために、学生、教師、舞踊熟練者という舞踊経験が異なる3つのグループに第2章で構築した認知枠組みを用いた評定実験を行い、有意差の検討と多変量解析の結果から、舞踊熟練者は舞踊運動をより有機的な全体性として捉え、時間性ではひと流れで捉え、空間性では3次元的な運動範囲で捉えていることを明らかにしている。

以上の第1章から第3章にわたる実験の成果を総合的に考察し、舞踊経験と舞踊の身体性の関連、そしてそこから舞踊教育における「見る」教育の必要性を提示したのが第4章である。

本章では、前述の「見る」様相とそれらの様相間の関係を図示するモデル（樹木図）と、実験結果から得られた知見との橋渡しがなされ、舞踊を「見る」行為は、浅くパラパラで感覚に近い状態から、学生では「感受」となり、スキルを獲得した教師のレベルでは「評価」に、そして舞踊熟練者では「審美」となり、ここに舞踊における審美眼の形成過程をみている。

更にそこから、舞踊を「見る」時、眼前に展開されるダンサーの舞踊運動を自分の身体に取り込み、同時に自分の身体も踊っているような感覚が生ずる現象を舞踊の身体性として捉え、その身体性の獲得が『審美』につながると考察している。

本論文は、研究のフィールドを舞踊教育に置き、舞踊経験の異なる被験者への評定実験を重ね、舞踊をみる見方、即ち、審美眼の形成過程、またそれに深く関わる舞踊の身体性についての実証的研究であり、舞踊教育における見る教育の意義と創り・踊り・見るという3つの行為の相互循環がもたらす見方の質的変化について重要な知見を得たものとして、その価値を高く評価することができる。

以上の審査結果から、本論文の審査委員会は、学位申請者の猪崎弥生は、博士（学術）の学位を授与される資格を有するものと判断する。

【レフリー付論文】

1. 「舞踊における動き (body action) の質 (quality) を評価するための主観的尺度の構築：動的力性 (kinetic force) の観点から」 体育学研究第45巻第1号、平成12年1月
2. 「舞踊における動き (body action) の質 (quality) から見た動きの構造について：動的力性 (kinetic force) の観点から」 体育学研究第45巻第3号、平成12年5月
3. 「イメージから見た舞踊作品の特性：イメージの因子構造の比較から」 体育学研究第48巻第2号、平成15年3月